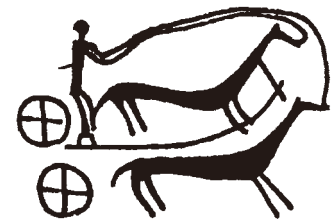


ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 96



教育総長賞受賞者の授業から	(4 ページ)
IDE 大学セミナー開催	(15 ページ)
科学イベントを多角的に実施	(22 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

「武士道」必修化のお知らせ?? ...

高等教育推進機構 准教授 山田 邦雅

突然ですが、こんな主張をする先生が現れたとします。『もし私が北大総長だったら「武士道」を必修科目にします。新渡戸稲造の「武士道」を精読する授業により、武士道精神の涵養を行います。そして、武士道精神に反する行動をとる学生はぶっ飛ばします(柔らかい物で)。こうして、芯の通った、世界のリーダーとしての資質を兼ね備えた学生が輩出されるイメージの大学にします。当然、教員も武士道精神に見合う学生対応が求められるでしょう。また、このような精神は、学部・研究活動にも影響を及ぼすはずで。総合教育部の教育が、大学の個性につながってゆくというのは、面白いのではないのでしょうか。』現代において武士道精神が有効か否かはさておき、この提案にはいろいろ問題がありそうです。特に、

- ・授業で精読
- ・学生をぶっ飛ばす
- ・北大生のイメージ

の部分は気になるところです。このような点を改善することが我々の部門の仕事です。申し遅れました。私は高等教育推進機構高等教育開発研究部門の山田と申します。

授業改善について

もし仮に武士道精神を涵養したい場合、「武士道」を精読する授業”で武士道精神が備わった学生が育つのでしょうか？ 武士道がどのようなものかの知識はつきますが、その精神を内面化することは難しいでしょう。教員は、学生がその価値を認め、実感しながら学ぶ仕掛けを練らなければなりません。

このため我々の部門では、授業が終わったときに学生がどのように成長してほしいか、成長させるためにはどのような方略が必要かを考えながら授



写真1 北海道大学教育ワークショップのようす

業計画書(シラバス)をつくる新任教員研修会を開催しています。これが北海道大学教育ワークショップです。各部局から若手教員が集まるまたとない機会であり、交流会の楽しみもあります(写真1)。

このワークショップの柱となっているシラバスの書き方は、DVDとしてもまとめられています。もし、参加する機会に恵まれなかった場合は、DVDで授業設計の基礎を習得することをお勧めします。DVDが必要な場合は当部門にご連絡下さい。(DVDの内容は北大OCWでもご覧いただけます。)(<http://ocw.hokudai.ac.jp/Materials/HokudaiFD/>)

教育倫理綱領

武士道精神が身につかないからといって、学生を“ぶっ飛ばす”ことなど許されません。たとえ柔らかいものを使ってもダメです。北海道大学教育倫理綱領では「教員は、すべての学生に自律的個の確立を促し、その人格を尊重し、敬意をもって接する。」と規定されています。(<http://www.hokudai.ac.jp/introduction/information/ethics/>)

また、教員は言葉で学生を“ぶっ飛ばして”しまうことが多いので注意が必要です。教員から敬意をもって扱われたことに感動したという学生の意見をたまに目にします。最近トイレの張り紙ですら「汚すな！」から「いつも綺麗に使って頂きありがとうございます。」に変わってきています。我々も“礼には礼をもって返す”効果にあやかりましょう。

この教育倫理綱領は、教育ワークショップで紹介し、カードも配布しています(写真2)。



写真2 北海道大学教育倫理綱領・北海道大学における科学者の行動規範カード

IR ネットワーク推進室

大学として、“武士道精神が備わった学生”のイメージを広めることは重要でしょうか。イメージはともあやふやなものだと思います。

昔ながらの北大生のイメージは「バンカラ」と言われることがあります。しかし、これは応援団のイメージではないでしょうか。目立つ部分が全体のイメージになってしまうことがあります。また、『大学図鑑!』(ダイヤモンド社)では、北大生のイメージに“堅実”, “穏やか”, “おとなしい”という単語が並んでいます。これは単に理系のエリート校の学生の特徴のようにも見えます。

現在まで、大学の教育改善はあやふやなイメージを基に進められてきた感があります。もしくは、イメージでは済まないくらい問題が顕在化してから対応することもあったでしょう。これからはエビデンスベースの教育改革が求められていますが、そもそも大学ではデータの収集を行っていない、または統括できていない状況であったと思います。

高等教育推進機構では、平成24年度に「IR ネットワーク推進室」(情報教育館3F)を設置しました。これは、平成24年度採択の文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」“教学評価体制(IR ネットワーク)による学士課程教育の質保証”により5年間運用されます。(<http://8gp.high.hokudai.ac.jp/>)

IRはInstitutional Researchの略です。一般企業が行っている経営戦略のための組織内データの解析をイメージされるかもしれませんが、現在では、Google検索でも大学IRの方がずらっと並ぶ時代になりました。

本取組の教学IRデータは、大学組織に関するデー

タ、学生の成績を含む教務データ、そして学生の自己評価を含むアンケートの回答データから構成されています。これらのデータは学生番号により関連付けられており、詳細な解析が可能となっています。

しかし、いくら詳細なデータを集めても、他大との比較が出来なければ客観的に特徴を見出すことはできません。本取り組みでは、8大学が連携校となっており、全大学で同じ項目のデータを集めて相互比較を行っています。また、この事業は、大学 IR コンソーシアムをベースに継続し、全国の多くの大学へ参加を呼び掛けています。現在コンソーシアムには 13 大学が参加しており、今年度中に 17 大学に増える見込みです (<http://www.irnw.jp/>)。

この報告書は全教員に配布されましたが、当部門の Web サイトでも閲覧できます。(<http://socy.hokudai.ac.jp/freshmansurvey10.pdf>)

また、部局でお探しのデータがある場合も IR ネットワーク推進室にご相談下さい。(内線番号 7344)

当部門の活動を、最新情報を中心に紹介してきま

したが、その他にも、中堅教員向け研修会「教育改善マネジメントワークショップ」、英語で授業を行うためのワークショップ(支援テキスト：<http://socy.hokudai.ac.jp/englishsupport.html>)を開催しています。

また、教員だけではなく大学院生の育成も行っています。大学教員は資格化されていないため、教育トレーニングを経験しないまま教壇に立つことがほとんどです。大学院生を将来の大学教員や社会の指導的リーダーの予備軍ととらえ、全学教育 TA 研修会、大学教員準備プログラムを実施しています。

当部門の活動の予告・報告は、全教員に配布されている機構紙「ニュースレター」や雑誌「高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—」に掲載されていますので、ご覧下さい。

我々の活動には、全学的な支援により大規模に行われているものが多々ございます。今後とも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

日本理科教育学会 第 63 回全国大会，北大で開催される

日本理科教育学会第 63 回全国大会実行委員長 鈴木 誠 (高等教育推進機構)

日本理科教育学会第 63 回全国大会北海道大会が、北海道大学札幌キャンパス高等教育推進機構、情報教育館、北海道大学総合博物館にて、平成 25 年 8 月 10 日、11 日の両日開催されました。高等教育推進機構の教員だけでなく、理学部や文学部、総合博物館の先生方のご尽力、また事務の皆さんの協力もあり、無事終了することができました。理科教育などの教科教育系の学会が、旧七帝大で開催されるのは大変珍しいことでもあります。

本大会では、従来の大会では見られない様々な工夫がなされました。その一つに、「理科教育の未来を切り開く 3 つのキーワード—直接体験・才能教育・次期学習指導要領から考える—」というテーマで、有馬朗人氏(元 文部大臣・東京大学総長)と隅田学氏(愛媛大学)、小川正賢氏(東京理科大学)司会の対談形式による特別講演が初めて行われまし

た。400 名近い方のご参加をいただきました。

また、北大の学術資産を生かした「理科教育からみた博物館利用の問題点を考える」というテーマで実行委員会企画特別シンポジウムを総合博物館で実施し、100 名近い方のご参加をいただきました。

一方、新学習指導要領への学習指導のあり方を議論する「解剖実習をどのように教えるか—生命観を育む指導のあり方—」「粒子概念をどのように教えるか—小中高を貫く粒子概念の系統的指導のあり方—」に関する一般シンポジウムが行われました。視覚に障害のある生徒への解剖の観察指導や生命倫理の問題など様々な視点から議論がなされていました。

さらに、「どうなる「理科教育学研究」：電子ジャーナル化は何を変えるか」というテーマで、日本理科教育学会「理科教育学研究」編集委員会主催による特別ワークショップも実施されました。

一般研究発表では「教員養成」「理科教育論、理科教育史」「諸外国の科学・理科教育」「教育課程、カリキュラム」「学習心理、教育評価」「授業研究、学習指導」「物理教材・教育法」「化学教材・教育法」「生物教材・教育法」「地学教材・教育法」「環境教育、STS教育、総合的学習」「教育工学、情報教育」の12カテゴリーで熱い議論が行われました(写真1)。

また課題研究では、「OPPAの理論と実践」「日本と中国の理科の教師教育におけるPCKの育成」「マイクロスケール実験の新たな展開—教材開発から実践まで—」「開発途上国と理科教育V」「大学生の実態調査を基盤とした教員養成に関する研究」「幼年期の新世紀型科学教育世界基準の創成へ向けて」「コアサイエンス事業の現状と課題」「新しい時代への探究学習の意味」の8課題で、多くの知見が発表されていました。



写真1 一般研究発表のようす

大会には900名を超える参加者があり、一般研究発表と課題研究発表合わせて353件、ポスター発表では44件、ワークショップでは5件、中高生のポスター発表では9件の発表がありました。

(鈴木 誠)

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

教育総長賞受賞者の授業から

ピア・ラーニング重視の授業の試み

人文・社会科学の基礎担当 文学研究科 教授 宮内 泰介

授業はいつも悩みます。正直言って人前で話すのは苦手ですし、学生を惹きつける話などできません。しかし、なんとか学生たちの学習意欲を引き出したい。学ぶおもしろさを少しでも会得してほしい。

そこで私はとっている方式は、ピア・ラーニングを重視した授業です(全学教育から専門教育に至るまで)。ピア・ラーニングとは、学習者同士がお互いに知識や知恵を持ち寄りながら、共同で学び、向上しあう学習方法です。具体的には、授業の中で、とにかくグループディスカッションを繰り返します。映像資料や新聞記事、文献資料などを示し、そこから問題を提示して、グループでディスカッションします。たとえば、自然資源をめぐる関係者同士が対立するという映像資料を見せて、その解決方法を考えてもらう。あるいは、商店街の活性化の取り組みについての報道資料を見せて、さて、商店街

活性化のために税金を使うことは是非かを考えてもらう。グループで結論を出すようなディスカッションをしてもらうこともありますし、結論は出なくてよいからとにかくディスカッションしてください、という場合もあります。ディスカッションの目標や手法にも、毎回なるべくバラエティを持たせるようにしています。

ピア・ラーニングを重視するのは、主に2つの理由です。一つは効果です。学生同士の学びあいは、教員が一方的に知識を注入しようとするのに比べ、「深くわかる」という点でも、「考える姿勢が身につく」という点でも、さらには実は「知識が身につく」

という点でも、何倍も効果があります。もう一つは、「答がない」という大学の学問の特徴を学生たちに会得してもらうには、やはり一方的な授業ではなく、自ら考えるというプロセスを重視した授業方法が適切だということです。

こうした授業をするのは、準備もけっこう大変ですし、いつもうまくいくとは限りません。しかし、授業アンケートで「授業のときの議論についてそのあとも考えたくて、その日、友だちと飲み屋で議論

をつづけた」などと書かれると、その苦勞も吹き飛ばすものです。もう一つ付け加えると、実は、たいへんとは言え、慣れてしまえば、講義主体の授業より楽かもしれません。それもこの授業形式のおすすめの理由です。

(私の授業が実際にどういふものかご関心をもたれた方は、拙著『グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング』三省堂、をご参照いただければ幸いです)

教育総長賞受賞の3つのポイント

線形代数学担当 理学研究院 准教授 坂井 哲

今回、教育総長賞をいただきました。心から嬉しく思います。(誰もがそう考えるように)本当は研究を優先したい、けれども教育も大事なのだと自分に発破をかけ、非常に時間をかけて苦勞した甲斐がありました。どのような点に配慮したのか、受賞のポイントは何か、を三つ紹介します。

まず第一に「いろいろな巡り合わせが良かった」ということです。今回の受賞対象教科は基礎科目の「線形代数学」だったのですが、それは「手を動かしているうちに感覚的に分かってくる」サブジェクトです。したがって、以下で紹介する「習うより慣れろ」的なアプローチが上手くハマったのでしょう。同じ基礎科目でも、厳しい定量評価が要求される「微分積分学」だったら、同じような高評価を得られたかどうか分かりません。それと、自分の担当していたクラスの学生が非常に元気だった、ということも重要です。こればかりは、我々が頑張ったところでコントロールできるものではありません。運です。

第二のポイントは「習うより慣れろ」です。毎回授業開始後20～30分間を使って、前回の授業の復習小テストを行ないました。「テスト」とは言っても、教科書やノートを見ても良いし、どうしても分からなければ、近所に座っているクラスメートと相談することも許しました。サブジェクトをしっかり理解してもらうことが目的でしたが、出席を取ることにも使えました。授業中には演習紛いのこともして「慣れて」もらいました。定理や命題は短く紹介し、むしろその意味するところ言い換えて説明し、

そしてすぐに練習問題を解かせて納得させる、という方針で一貫しました。

第三のポイントは「プロジェクターを使う」ことです。数学の授業では板書が一般的だと思われませんが、実はプロジェクターを使うと便利なことが二つあります。一つは「定理や命題を短く紹介」することが可能になるという点です。線形代数学では、具体的な行列を例に定理の意味するところを解説しなければなりません、板書だと時間のかかる行列でもプロジェクターなら一撃です。さらに板書量が減ることで、生徒に尻を向けている時間が減り、彼らの顔を見ながら授業できるのも良いことです。「尻を向けている時間」は、私が海外で初めて教えたときに指摘された点で、それ以降ずっと気にして「その時間」を減らすよう努力してきました。もしかしたら、「顔を見ながら」というのも高評価に繋がったのかも知れません。

以上が、すぐに思いつく教育総長賞受賞の三大ポイントです。他にも幾つか細かいポイントがありますが、それは企業秘密としておきます。異なる講師が様々なやり方で授業をするのも、大学内の多様性として当然あるべきでしょうから。

この寄稿が皆さんの参考になれば幸いです。

Learner-centric learning of English language

Goh Kawai(河合 剛), associate professor, Center for Language Learning

I teach English language to freshmen, some in an online course required of all students taking English language, and others in elective blended courses that combine online assignments and in-person conversations. I have taught over 99 percent of current undergraduate students at Hokudai. In March 2013, I was among several faculty members who received the Hokudai president’s award for teaching excellence.

Receiving this award delights me for 3 reasons. (1) My students acquired skills in social conduct and technical communication. My students are satisfied with their accomplishment, and may pursue further abilities from a range of choices that students now realize are available to them. (2) My TAs can mention their contribution in their resumes. Having TA-ed in award-winning courses gives TAs an extra chance during job interviews to emphasize how friendly and caring they are. (3) Hokudai acknowledges teaching excellence. By creating the president’s award for teaching excellence (and its sister award for research excellence) in 2012, Hokudai is asserting its earnest and eager attention towards teaching and research practice (Figure 1).

My teaching practice improved via 3 experiences. (1) Noriko (my wife; we teach together) and I became students. We took an *ab initio* course in Dutch language when the Canon Foundation Europe sent us to the University of Antwerp in 2008. We learned language teaching techniques, plus what it feels like to be a student. (2) I asked my students what they want to learn. I suggested goals, and students chose tasks. We entered into a learning contract that empowered

students to determine the course format and held them accountable for their progress. (3) I built a learning environment such that my out-of-class assignments prepared students for in-class activities. Preparing for class was a double win for GPA-obsessed freshmen; they earned points for out-of-class homework and in-class interactions. Regardless of motive, students gained the know-how I wanted them to (Figure 2, 3, 4).

I have 2 suggestions for my colleagues. (1) We should measure and evaluate performance. We should not take roll. I have never taken a class where merely attending made me smart. Grading in-class responses can be largely automated (and students kept alert) by using clickers for instance. Hokudai’s Institute for the Advancement of Higher Education has clickers that faculty members may use. (2) Most Hokudai students are mature learners who can and should be entrusted with their learning plans. Unfortunately a handful of unmotivated students poison the classroom atmosphere. Repeat students should demonstrate that they are worthy of occupying seats that should be given to serious students taking the course for their first time. Students who fail twice should be denied access to that course for a significant period.

Thank you, and good luck to all of us.



Figure 1 Photograph of a TA briefing at the beginning of a class period. Our blended learning courses have up to 8 TAs per class. Students have ample opportunities to converse in English language. This photo shows some of our TAs from 2012 fall semester dressed up for our Christmas party.



Figure 2 Photograph of our *ab initio* Dutch language class. Class met 3 times per week for 10 weeks. Because only Dutch was spoken in class, we were often utterly lost, and that was beneficial. Becoming students highlighted what we need to do in our own classes. For instance, bringing personal items stimulates conversations. We passed a CEFR A2 test (pass rate about 60 percent).

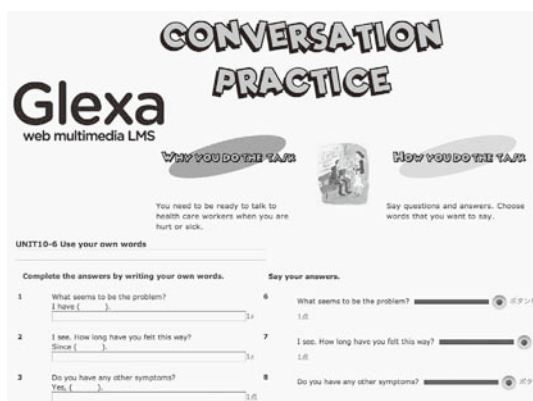


Figure 3 Screenshot of online assignments. Students write and say their phrases online before coming to class. This learner management system (Glaxa, <http://www.ver2.jp/>) was designed at Hokudai for autonomous or blended learning of various subjects including language. Glaxa is used at 30 schools in Japan and Korea.



Figure 4 Photograph of classroom conversations. Our students spend most of the class period on their feet, talking with classmates and TAs. Well-prepared students arrive eager and leave proud. Unprepared students are painfully obvious to everybody, and usually come prepared the next time.

フレッシュマンセミナーの授業改善

一般教育演習担当 薬学研究院 講師(現・医学研究科 准教授) 南保 明日香

私は本学のフレッシュマンセミナーを2年間担当させて頂きました。授業改善のために未だに試行錯誤を重ねている状況で総長教育賞を頂くことになり、驚いたというのが正直なところです。ここでは、授業を改善するために自分なりに工夫した点について紹介させていただきます。

まず、大学生になりたての学生の立場だったらどのような講義に魅力を感じるだろうか、ということ意識して授業内容を設計しました。例えば、ウイルスに関する基本的な知識を教えることに加えて、ウイルス研究の最前線、感染症が社会に与える影響、学術論文に関する情報、科学者の倫理等、様々な視点からウイルス学を捉え、変化に富んだ講義を行うことを心がけました。また、学内のウイルス研究者に出張講義をお願いして、様々なアプローチを用いてウイルスの研究が行われていることを実感してもらいました。また、ウイルス学を理解するためには、基本的な生物学的知識を必要とします。受講生の中には高校で生物を選択していない学生も含まれていたため、初回に生物学オーバービューを行いました。また、受講生がフォローできているかどうか観察しながら講義を行い、講義の最後には内容を理解できたかどうかフォローアップを行うよう心がけました。

さらに、約20名という少人数の学生が参加する

ゼミ形式である特色を生かして、学生に積極的に授業に参加してもらうために、以下の工夫を行いました。講義内容から派生した質問を問いかけ、全ての学生に意見を述べさせました。特に「ウイルスは生物であるか、非生物であるか」という問いかけを3回行い、受講する前後で自分の考えがどのように変化したかを実感させました。また、各々の受講生が選んだテーマについて発表させ、質疑応答時での積極性を評価の対象にして、学生の講義への参加を促すようにしました。

最後に、個人的な話で恐縮ですが、私が学部1年生だった時に、臨時で担当されたにも関わらず非常に感動的な講義をされた先生がいらっしゃいました。講義終了後、学生の間から自然に拍手が生まれ、「前日夜遅くまで講義の準備をした甲斐があった」と照れていた姿を20年以上経った今でも鮮明に記憶しています。教える側の熱意は学生に伝導する、ということ身を以て体験した瞬間でした。今回の受賞を励みに、あのような印象的な講義に少しでも近づけるよう今後とも努力して行きたいと思っています。

「体育って何」を形にする授業をめざして

体育学担当 教育学研究院 助教 厚東 芳樹

この度、お陰様で教育総長賞の表彰をうけました。私の実践の背景には、歴代、北大体育学を担当してこられた先生方の「体育とは」という哲学からの学びがあります。一般に、体育とは「息抜き授業」など楽な授業というイメージではないでしょうか。北大に入学してきた学生たちもそのような感覚で1学期のガイダンスに来ます。しかし、北大の体育学の授業はそのイメージとはまったく違う授業ですし、私の授業でも同じです。

さて、具体的に何をしているのかといえば2つあります。一つ目は、全スポーツに共通した「スポーツ科学の知見を基にした内容」提供です。体育ではいい動作（技術）の獲得が目標の一つです。スポーツの各場面では平均0.4秒前後の情報処理能力が求められるため、いい動作とは合理的かつ経済的な動作ということになります。また、人間の究極的な情報処理スピードは0.11秒といわれています。こうした具体的な数字に基づいて、ひとつの動作がどうあるべきか学ぶ場を保障しているのです。つまり、体育・スポーツ分野の研究に触れることができる場が体育学の授業なのです。

二つ目は、他のスポーツとは異質な「取り扱う教材独自の内容」の提供です。例えば、私がとり扱う「スノーケル」教材は、誰もが気楽に楽しめるスポーツである反面、「事故＝死」に繋がる率の高いスポー

ツです。そこで、「マスククリア」「スノーケルクリア」の技術、「フラッター」「ドルフィン」などの泳法技術、水上での救命救急法などの技術獲得は必修です。これらの技術を獲得するために、学生は毎授業1キロ近く泳ぎます（写真1）。ただ、これらをプール実習だけに留めると「事故＝死」を感じることはできません。そこで私は、実際に海洋という自然の場で実施することで、学生はまさに身をもって海や川の危険を学び、どうすべきかを考えることができるのです。私の授業では、理屈だけでなく、身をもって経験する真の学びを保障することを心がけています（写真2）。

最後に、合宿では魚のさばき方や食べ方といった食育、集団行動なども重視しています。学生の授業評価をみる限り、こうした海洋合宿までの実施を高く評価してもらっていることがわかります。ただ、こうした取り組みは体育用品やTAの充実といった環境整備によって成立していることも事実です。今後も、これらへの感謝を忘れず、授業展開していきたいと考えています。



写真1 プール実習のようす



写真2 海洋実習のようす

学務委員会報告

平成 25 年 8 月 1 日 (木) に平成 25 年度第 1 回学務委員会, 平成 25 年 9 月 5 日 (木) に第 2 回, 10 月上旬に第 3 回 (持ち回り) が開催され, 以下の議題について議論されました。

平成 25 年度第 1 回学務委員会

議題

1. 平成 26 年度全学教育科目の開講計画

報告事項

1. 平成 25 年度全学教育専門委員会の検討事項
2. 平成 25 年度第 1 学期履修者数
3. 平成 24 年度第 2 学期の成績評価結果等
4. 平成 24 年度第 2 学期の GPA
5. 平成 24 年度初習外国語 II の CALL 授業に関する報告
6. 総合入試入学者の移行先の決定
7. 平成 24 年度 1 年次学生の異動
8. 学生による授業アンケート報告書及び授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ

平成 26 年度全学教育科目の開講計画

平成 26 年度の開講計画について了承されました。現在, この案に基づき開講計画を立案中です。

平成 25 年度全学教育専門委員会の検討事項

総合入試に対応した全学教育の実施と検証, 授業方法の改善方策に関する検討等を行うことが報告されました。

平成 25 年度第 1 学期履修者数

総合入試導入後, 2 年次以降に全学教育科目履修者の減少が見られることが報告されました。

平成 24 年度第 2 学期の成績評価結果等

現在全学教育科目では GPA が 1.95 以下や 2.95 以上となるような極端な成績の偏りがある教員には, 問い合わせをすることになっており, 平成 24 年度, この対象となった科目について報告がありました。

平成 24 年度第 2 学期の GPA

平成 24 年度第 2 学期の GPA, 通算 GPA は前年度の 2.51 から 2.53 へと微増が見られました。

平成 24 年度初習外国語 II の CALL 授業に関する報告

平成 20 年度から初習外国語に CALL 授業が導入され既に 5 年がたち, 定着した感があるとの報告がありました。

総合入試入学者の移行先の決定

総合入試入学者の移行先について, 文系学部にて 97 名, 理系学部にて 1,091 名の進級が確定したことについて報告がありました。

平成 24 年度 1 年次学生の異動

平成 24 年度 1 年次学生の異動について報告がありました。

学生による授業アンケート報告書及び授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ

平成 24 年度のエクセレント・ティーチャーズに関する報告があり, 認定された教員はホームページに掲載される予定です。

平成 25 年度第 2 回学務委員会

議題

1. 平成 26 年度全学教育科目における 6 講時の実施
2. 学生の懲戒

報告事項

1. 道内国立大学の教養教育連携実施
2. 平成 25 年度第 2 学期の履修調整
3. 全学教育における流用定員の解消状況
4. 平成 25 年度 1 学期 1 年次学生の異動

5. 全学教育に係る授業アンケートにおける追加質問の実施

6. 出欠確認システムによる授業回数の確認

平成 26 年度全学教育科目における 6 講時の実施

平成 26 年度も今年度に引き続き 6 講目の授業を行うことが決定されました。

道内国立大学の教養教育連携実施

平成 24 年度に採択された国立大学改革機能強化推進補助金については、平成 29 年度までの 6 年間の事業であり、「北海道内国立大学の機能強化」事業として、道内 7 国立大学の事業として申請したものです。

遠隔授業や対面授業の実施に関しては、当面は、平成 26 年度のトライアル実施に向けて関係会議等で検討を進める予定となっています。

平成 25 年度第 2 学期の履修調整

本年度、新たに留学支援英語や多文化交流科目などの新渡戸カレッジ関連科目が導入されたことに伴い、新渡戸カレッジ関連科目も抽選科目として全体の抽選プロセスに融合していくとの報告がありまし

た。

全学教育における流用定員の解消状況

平成 26 年度までに学部一貫教育体制に伴う流用定員が解消されるとの報告がありました。

平成 25 年度 1 学期 1 年次学生の異動

平成 25 年度 4 月から 8 月までの休学について了承されたことが報告されました。

全学教育に係る授業アンケートにおける追加質問の実施

平成 25 年度第 2 学期の授業アンケートから、全学教育の教育目標の達成度に関するアンケート調査を実施することとしました。

出欠確認システムによる授業回数の確認

第 2 学期も引き続き試行を継続することとしました。

平成 25 年度第 3 回学務委員会(持ち回り)

議題 1. 学生の除籍

(鈴木 久男 理学研究院教授・副機構長)

平成 25 年度 全学教育科目企画責任者名簿

授 業 科 目	所 属	職 名	氏 名
「思索と言語」	文学部	教授	佐藤錬太郎
〃	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	土永 孝
「歴史の視座」	文学部	教授	三木 聰
〃	法学部	准教授	水野 浩二
〃	経済学部	准教授	韓 載香
「芸術と文学」	文学部	教授	佐藤 淳二
〃	〃	教授	安達真由美
〃	メディア・コミュニケーション研究院	教授	石橋 道大
「社会の認識」	文学部	准教授	高橋 泰城
〃	法学部	教授	尾崎 一郎
〃	経済学部	准教授	須賀 宣仁
「科学・技術の世界」	文学部	教授	池田 透
〃	理学部	准教授	田中 良和
〃	工学部	教授	菊地 優
「健康と社会」	教育学部	教授	大塚 吉則
「体育学」	〃	教授	西尾 達雄
「統計学」	経済学部	教授	鈴川 晶夫
「情報学」	工学部	教授	北 裕幸
「英語」「英語演習」	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	鈴木志のぶ
「ドイツ語」「ドイツ語演習」	〃	教授	寺田 龍男
「フランス語」「フランス語演習」	〃	教授	長野 督
「ロシア語」「ロシア語演習」	〃	教授	山田吉二郎
「スペイン語」「スペイン語演習」	〃	准教授	増田 哲子
「中国語」「中国語演習」	〃	准教授	清水賢一郎
「韓国語」「韓国語演習」	〃	准教授	玄 武岩
「外国語演習」	文学部	教授	中戸川孝治
〃	教育学部	准教授	大竹 政美
〃	法学部	教授	田口 正樹
〃	経済学部	准教授	大野 由夏
「外国語特別演習」	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	飯田 真紀
「人文・社会科学の基礎」	文学部	准教授	小田 博志
〃	教育学部	教授	宮崎 隆志
〃	法学部	准教授	緑 大輔
〃	経済学部	准教授	岡田美弥子
「数学」	理学部	教授	大本 亨
「物理学」	〃	准教授	根本 幸児
「化学」	〃	教授	村越 敬
「生物学」	〃	准教授	勝 義直
「地球惑星科学」	〃	准教授	石渡 正樹
「心理学実験」	文学部	教授	田山 忠行
「自然科学実験（物理学系）」	理学部	准教授	三品 具文
「自然科学実験（化学系）」	〃	准教授	廣川 淳
「自然科学実験（生物学系）」	〃	准教授	和多 和宏
「自然科学実験（地球惑星科学系）」	〃	准教授	沢田 健
「基礎自然科学実験」	〃	教授	小野寺 彰
「日本語・日本事情」	国際本部	准教授	中村 重穂

2013 年度 IR シンポジウム 「教学評価 (IR) の国際的進展と日本の今後」 開催

8月7日(水)、表記シンポジウムが北海道大学高等教育推進機構にて表1のプログラムで開催されました。本シンポジウムは、文部科学省平成24年度採択大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」の取組の一環として、連携8大学の代表校である本学にて行われたものです。ホームページやパンフレットでの広報によって、全国の高等教育機関の教職員から多数の問い合わせがあり、当日は66名の参加がありました。

会場となったスタジオ型多目的中講義室では、6名の登壇者からIRの取り組みや意義について事例を交えた発表が行われました(写真1)。ソウル大学のミン氏(当機構の特任准教授)による基調講演では、韓国全国の32大学を対象としたIRデータをもとに、韓国の大学生の「学習過程」と「学習成果」の調査が報告され、①授業中、授業外において教員との関わりに消極的、②文系学生は理系学生より学習活動が消極的、③大学の教育内容・環境に対する満足度は高いという傾向が示されました。これは、本学で行った学生調査の結果と類似しており、日本と韓国の大学生の共通点が浮かび上がりました。

また本調査では大学の規模や立地条件別の比較分析も行われており、①非首都圏、小規模大学では学生が教員と積極的に関わっている、②教育内容・環境の満足度は首都圏大規模大学で高く、非首都圏大規模大学で低いといった興味深い結果が発表されました。参加者にとっては、国外の事例発表から新たな分析視点やIRの有効な活用法の手がかりを得る、重要な機会となりました。

また、甲南大学の濱谷氏から大学間連携事業によるIRの取組概要と甲南大学のIR推進状況、同志社大学の山田氏から本シンポジウムの共催である



写真1 シンポジウムのようす

表1 2013年度IRシンポジウムプログラム

第1部	[シンポジウム]
13:00-13:15	開式のことば 細川 敏幸氏 北海道大学 高等教育推進機構 教授
13:15-14:00	基調講演(逐次通訳)「韓国の大学におけるIRデータの分析—学習過程の分析によるラーニングアウトカムの向上—」 ミン ヘリ氏 ソウル大学 教育学習センター准教授(北海道大学 高等教育推進機構 特任准教授)
14:15-14:45	講演「教育の質保証を推進するためのIR」 濱谷 和生氏 甲南大学 副学長 大学企画室長 法科大学院教授
14:45-15:00	講演「大学IRコンソーシアム—中間組織としての意義と役割—」 山田 礼子氏 同志社大学 学習支援・教育開発センター長 高等教育・学生研究センター長 社会学部教授
15:00-15:15	講演「IRシステムについて」 高橋 哲也氏 大阪府立大学 学長補佐 高等教育推進機構副機構長 教授
第2部	[ワークショップ]
15:45-17:00	「IRシステム体験型ワークショップ—複数機関のデータに基づくIRの実践—」 宮田 尚子氏 同志社大学 高等教育・学生研究センター 特別研究員

「大学 IR コンソーシアム」の意義と役割について、それぞれご講演いただきました。最後は大阪府立大学の高橋氏から、データの蓄積・分析・グラフ表示が可能な「IR システム」について、開発経緯と概要の説明がありました。休憩をはさんで行われたワークショップでは、同志社大学の宮田氏を講師に、「IR システム」を体験していただきました。

全体を通じて多数の質問、意見の挙手があり、熱気に満ちた活気ある議論が展開されました。アン

ケート (図 1) から、大学間の相互評価 (IR ネットワーク) への関心の高さをうかがうことができました。今後も、本事業の 8 大学が中心となり、IR のネットワークのさらなる拡がりのために活動の進展が求められています。代表校として本学が担う役割の重要性と認識を新たにし、大学教育の質的向上に向けて、IR の実践と普及に努めて参ります。

(徳井 美智代, 宮本 淳)

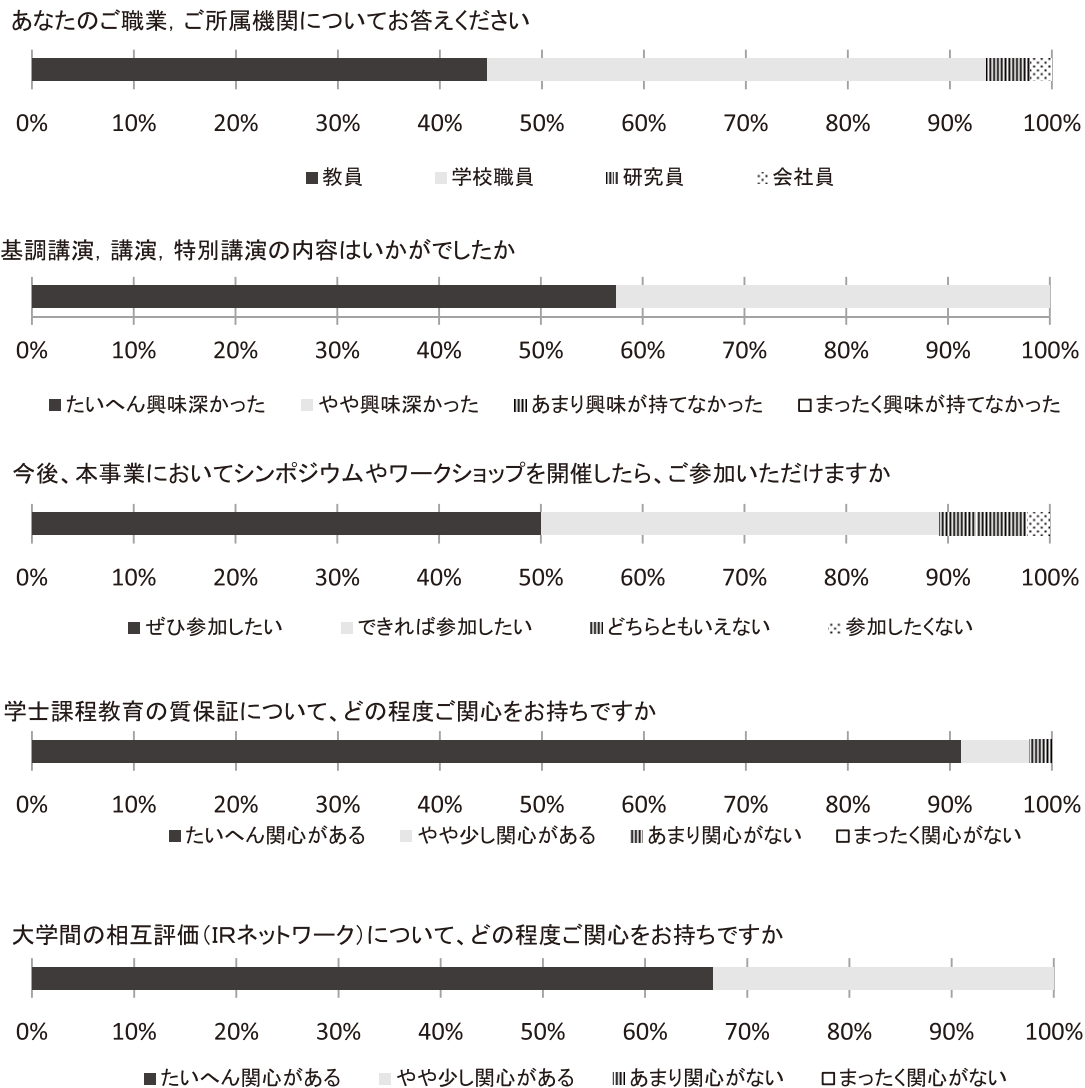


図 1 参加者アンケートの結果

「大学教育の質改善に向けた企業からの意見収集調査報告書 2013」を発行

平成 24 年度採択文部科学省大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制 (IR ネットワーク) によ

る学士課程教育の質保証」による取組の一環として、昨年度お茶の水女子大学と北海道大学で行った企業

調査の結果を、報告書として発行しました(図1)。

本調査は、2013年1月に、日本の株式上場企業3562社を対象に実施したものです。郵送による記名式アンケート調査で、有効配布数3444通、回収数は448、回収率は13%でした。質問内容は、新卒採用状況、現在大学が実施ないし注目している諸施策に対する認識と関心の程度、大学教育に対する意見などです。

回答をみると、2013年度の新卒採用予定は、2012年度と比較して「増」が34%、「同様」が44%、「減」が15%となっており、新卒採用は増加基調にあることがわかります。

また、大学が実施している教育施策の中で、企業の関心が高かった項目は、「コンピテンシーの育成を主目的にした授業プログラムの実施」(関心あり82%)、「グローバル人材育成のための英語コミュニケーション能力の強化策」(関心あり71%)、「(インターンシップ・社会体験プログラムなどの)キャリア支援教育」(関心あり71%)となっています。企業は、大学教育に、社会で働くために必要な能力の育成をより具体的に期待していることがみえる結果となりました。

大学の教育に望むこととして、自由記述欄へ記載いただいたコメントの中には、基礎学力の低下やコミュニケーション能力、主体性を育む教育への要望などが多く寄せられました。「自ら学修するという

過程を通じて、社会で通用する人材の形成をお願いしたい」という企業の声に耳を傾け、大学としてどのような教育施策で社会的要請に添えていくのか、その方途を見いだすことが課題となっています。本調査結果を公表し、広く諸企業、諸大学と共有することは、今後の大学教育の施策展開に資するものと考えています。

報告書は下記URLからご覧いただけます。

<http://8gp.high.hokudai.ac.jp/3-houkoku.html>

(徳井 美智代, 宮本 淳)



図1 大学教育の質改善に向けた企業からの意見収集調査報告書 2013

各学部、研究科等のFD・TA研修実施状況を公開

— 次世代FD研究会 —

平成24年度の各学部、研究科等のFD・TA研修実施状況をまとめ、高等教育開発研究部門ホームページに公開しました。

<http://socyo.high.hokudai.ac.jp/AllFD/AllFD2012.htm>

教員研修(FD)は、大学院教育(平成19年度)、学士課程教育(平成20年度)ともに大学設置基準等にて義務化され、各部局等で実施されています。義務化前より実施している部局も含め、これまでの蓄積により様々な内容・形式の研修が行われるようになりました。今回は、FDの更なる改善をはかる

ための基礎資料とすべく、次世代FD研究会の協力のもと情報の集約をおこないました。

次世代FD研究会は、17部局の委員より構成されており、その中の15部局から回答をいただきました。実施内容に加え、実施時期、参加人数等も掲載されています。多い部局では研修会を8回実施したそうです。

この集約された情報をもとに、FD・TA研修のあり方を各部局で検討され、更なる改善がはかれることが望まれます。

(竹山 幸作)

表1 平成24年度FDの部局別参加者数

部局名	理学研究院	文学研究科	医学研究科	保健科学研究院	歯学研究科	情報科学研究科	水産科学研究院	農学研究院	薬学研究院	教育学研究院	メディア・コミュニケーション研究院	工学研究院	先端生命科学研究所	高等教育推進機構
参加者数(のべ)	不明	65*	123	131	385*	63	162*	241	111	15	55*	60*	117*	205

注) *はおよそのべ参加者数。記述のない部局からは報告がありませんでした。

高等教育 HIGHER EDUCATION

2013年度IDE大学セミナー開催される

北海道支部のIDE大学セミナーが「地域連携学習の未来」をテーマとして、8月8日(木)～9日(金)にホテル札幌ガーデンパレスで開催されました。

グローバル人材養成が日本の大学に求められていますが、その期待される人材像の一つは即戦力になることです。大学外の現場、すなわち大学の立地地域に出て活動すれば、即戦力になるために多くを学ぶことができます。大学教育の特色を地域連携に求めることは米国でも見られ、有効な学習方法です。しかし、地域連携を生かした教育は、日本ではまだ十分ではありません。そこで、今年度のIDEセミナーでは、地域連携学習について積極的に展開している国内の活動についての事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう

企画しました(表1)。

特別講演

最初の講演は、山形県を中心に日本全国を舞台として活躍している小田先生でした(写真1)。平成17年、山形大学はSDをきっかけとして、最上広域圏の8市町村の首長と包括的協力協定を結び、最上広域圏全体をバーチャルなキャンパスと見立てた「エリアキャンパスもがみ」を設立し、大学と地域が連携(大地連携)して教育・研究・社会貢献を推進していくことになりました。そこでは、①地元での大学祭、②市民とのタウンミーティング、③学生の活動「もがみ協力隊」、④専門科目の授業、⑤広報誌、⑥研究年報の発行の諸活動を展開しました。平成18年度には、全学共通教育に新たな授業

表1 2013年度IDE大学セミナープログラム

- 特別講演(1日目)「山形大学の大地連携による現地体験型授業とその発展」
山形大学 教育開発連携支援センターFD支援部門長 教授 小田 隆治
- 特別講演(1日目)「和歌山大学における地域連携と大学教育」
和歌山大学 地域連携・生涯学習センター長 教授 村田 和子
- シンポジウム(2日目)「北海道における地域連携学習の進展」
司会：北海道大学教授 木村 純
- ・北海道医療大学リハビリテーション学部における地域連携学習
北海道医療大学 教授 鈴木 英樹
- ・札幌市立大学大学院デザイン研究科における地域連携教育
札幌市立大学デザイン学部・教授、デザイン研究科長 教授 城間 祥之
- ・学びあいのコミュニティ 帯広畜産大学
帯広畜産大学 副学長(学生支援) 教授 前田 龍一郎
- ・ものづくり技術の伝承から、新技術の開発まで 一室蘭工業大学における産学官連携ものづくり人材育成
室蘭工業大学 もの創造系領域 教授 清水 一道

「フィールドワーク：共生の森もがみ」を開講しました。「フィールドワーク」は、①土日を利用し現地に宿泊する現地体験宿泊型授業であり、②地元の匠たちを講師とし、③地元の自然・文化・産業を活用した、④地元の従来からあった活動を基盤として編成された教育プログラムです。

昨年度、文科省の「大学間連携共同教育推進事業」に東日本の大学間連携組織「FD ネットワーク “つばさ”」を母体としたプロジェクトが採択されました。本プロジェクトのメインの事業の一つは、「フィールドワーク」をベースとした現地体験宿泊型の「大地連携ワークショップ」です。これを、本年度から山形県以外に北海道と神奈川県、そして米国で開催し、様々な大学から集まった学生が受講するそうです。

次の特別講演は、地域連携を意欲的に進めている、和歌山大学の村田先生でした（写真2）。和歌山大学は、2010年7月県唯一の国立総合大学として、大学全体の基本目標の一つである「地域を支え、地域に支えられる大学」、持続可能な社会の実現に寄与するために「地域創造支援機構」を創設しました。機構の3センターのうち「地域連携・生涯学習センター」が教育面での連携を担います。本センターは、ネットワーク循環型事業「地域子育て支援&研究&教育」、高・大・地域連携事業「まなびの郷KOKO塾」などを実施しています。また、南紀熊野（田辺市）、岸和田、和歌山市内（まちかどサテライト）にサテライトを持ち、地域住民の利便性を確保しています。南紀熊野サテライトでは、9科目の学部授業を開講し、のべ650名が受講しています。ここでは、地域研究を推進するとともに修士論文の発表会など「人材育成と誘致」を目標とした活

動を行っています。さらに岸和田サテライトの「地域で学び合う大人のネットワーク」、和歌山大学まちかどサテライトの小学生を対象とした「まちかど土曜楽交」などが実施されています。総じて、地域の発展なくして大学だけの発展はありません。大学がコミュニティの核になるためには、地域の課題と大学の研究・教育をつなぐコーディネーターの役割を果たすことが重要であることが示されました。

シンポジウム

2日目のシンポジウムでは、道内の4大学のシンポジストが各機関の取り組みについて報告されました（写真3）。

北海道医療大学からはリハビリテーション科学部の鈴木先生が、地域リハビリテーションの理解及び実践を通して、多職種との連携の必要性を理解するとともに、地域課題改善に向けたインフォーマルな社会システムの構築を行う地域連携について解説されました。本年度から実施する具体的内容は、①講義の一環としての、学生による在宅高齢者への個別支援、②地域在住高齢者と一体となった介護予防に関する教室（転倒骨折予防教室や認知症予防教室）の企画や開催、③地域在住の高齢者や障がい者の方々の本学部講義への参画（OSCEやコミュニケーション関連科目）だそうです。

次に札幌市立大学城間先生は、同大学のデザイン研究科における地域連携について話されました。同研究科は、平成22年4月に開設され地域との連携教育を行っています。その一例として「地域プロジェクト演習（必修・2単位、2年前期開講）」があります。本演習は北海道内の市町村や民間企業・NPO法人等と連携して地域課題に取り組む実践プ

プロジェクトです。空間デザイン分野、製品デザイン分野、コンテンツ・メディアデザイン分野の学生2名～6名と教員1～2名でチームを作り、連携先の担当者らとの議論や現地調査・デザイン実践などを通して解決策を探求し、最終的に、企画・立案、作品制作、提言案等にまとめることを行っています。例えば、平成24年度は「厚真町中心市街地活性化策に関する提案」、「若者のまちづくり参加を促す映像制作」、「新さっぽろアークシティにおけるグリーンカーテンの提案」等を実践しています。

帯広畜産大学副学長（学生支援）の前田先生が、同大で行われている地域連携教育を解説されました。それによれば、帯広畜産大学は学生への幅広い見識と国際性の育成を目的に、21世紀COE、グローバルCOEプログラムの実施、大学院畜産衛生学専攻（博士課程）の設置、JICAとの25年以上にわたる連携活動などを行ってきました。今回の講演では、実践力のある人材の育成を目標に行っている活動の中から、全学農畜産実習、実学実習教育の強化、敷島製パン（とち夢パン工房）、おびひろ動物園（おびひろ動物園大学 OZU）との連携について紹介さ

れました。「学びあいのコミュニティの創造」のために帯広畜産大学は数多くの事業を行っています。

最後に室蘭工業大学の清水先生は、地域密着型の大学として産学官連携及びものづくり人材育成に取り組んでいる、室蘭大学の地域連携について話されました。室蘭工業大学は、北海道、室蘭市、地元企業など合わせて約30団体の産学官コンソーシアムからなる室蘭シップリサイクル研究会を発足させ、2008年から2年間、ヤード調査や漁船の解体試験、騒音などの環境測定などの研究業務、研究会活動、市民周知のシンポジウムを開催しました。また国土交通省の「先進国型シップリサイクルシステム構築に関する調査」事業にも採択され、2010年は1万2千トンクラスの自動車搬送船のモデル解体事業を行いました。これら事業を行うにあたり地元企業への船舶解体技術の構築や人材育成といった技術面、地域住民への情報発信や、小中学・高校生への環境学習などを実施してきました。現在も、効率かつ安全性を高めた船舶解体技術の開発を実現化するための研究テーマとして学生が参加しています。

（細川 敏幸）



写真3 シンポジウムでの質疑応答

歯学研究科のFDワークショップに参加

平成25年8月29日(木)～30日(金)の2日間開催された、歯学研究科第14回FDワークショップに参加しました。

歯学研究科では、毎年工夫を凝らしたFDワークショップを開催されています。昨年度は、教員だけでなく大学院生も参加し、従来と異なる視点から改善点等を見出していくという新しい形式のワークショップだったそうです。

今年は、メインテーマを「コーチングコミュニケーションの引き出しを増やそう」と設定し、例年のプロダクト産出型ではなく、体験実践型ワークショップを開催されました(写真1)。

講師は、日本歯科大学附属病院よりお招きした仲谷寛先生と大澤銀子先生です。

ワークショップは、講師によるレクチャーと実践(ロールプレイ等)で進みました。レクチャーでは、コーチングとは「クライアントの自発的な行動を促すためのコミュニケーション技法」であり、基本的



写真1 ワークショップのようす

な流れは、①ゴールを決める、②現状を知る、③障害と強みを知る、④行動計画の立案、であると教わりましたが、実践ではなかなかうまくできません。教員としての性か、クライアントの自発性を考慮せず、コーチ自身が考えるゴールに導いてしまいがちです。一朝一夕にて完璧なコーチング技術の実践は難しいですが、少しずつ学生対応、教育、FD等に活用していきたいと考えています。

(竹山 幸作)

初心者向けELMSミニ講座を開催

平成25年9月20日(金)に、情報教育館4階にて「初心者向けELMSミニ講座」を開催しました。

ELMSは、北海道大学の教育学習支援システムで、課題の実施、資料の掲示、掲示板などのコミュニケーションツールなど、様々な授業支援のサービスを利用することができます。学部学生は、ほぼ100%が利用登録を行い、操作に慣れている者も多くなっていますが、教職員にはELMSをほとんど利用したことがないという方も少なくありません。

そこで、ELMS利用教員の裾野拡大に向け、教育に特化した最低限の項目に絞った「初心者教員向けELMS操作マニュアル」を作成し、講習会を実施する計画を進めています。今回の講座は、そのトライアルとして実施しました。

ELMSの概要を説明した後、①ELMSへのサインオン、②グループの開設、③参加者の管理、④お知らせ・資料の掲載、⑤課題、の各項目について、ミニレクチャーと暫定版マニュアルを参照した実際



写真1 ELMSミニ講座のようす

の操作にて進めました。6名の参加者の方からは、ELMSの機能や使用方法、マニュアルの理解しにくい点などの、様々な質問・指摘をいただきました。これらのご意見をもとに、マニュアルおよび講習会の改善につなげて参ります。

なお、11月にも「初心者向けELMSミニ講座」を開催予定であることを申し加えます。

(竹山 幸作)

第15代 Kitara 専属オルガニスト・カチョルさんの クラーク会館オルガンリサイタルに400人来聴！

2013年8月16日にクラーク会館講堂で、札幌コンサートホール Kitara 第15代専属オルガニスト、マリア・マグダレナ・カチョルさん(ポーランド出身)＝写真 Kitara にて＝と声楽家の松井亜樹さん(札幌大谷大学短期大学部)を迎えて、講演と演奏の会「オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽」が催され、400人近くの聴衆がすばらしい演奏と50年近い歴史をもつクラーク会館パイプオルガンの美しい響きを堪能しました。プログラムは以下のとおりでした。

第I部：「ポーランドにおけるオルガン音楽」

お話：M. M. カチョル

第II部：演奏 M. M. カチョル (オルガン) (K),
松井亜樹 (ソプラノ) (M) と
立花雅和 (フルート) (T)

(1) J. S. バッハ：トッカータとフーガ ニ短調(K),
(2) M. スジンスキ：即興曲集 悲歌 (K), (3) G. F. ヘンデル：オペラ《セルセ》より「樹々の陰で」(M & K), (4) J. S. バッハ：カンタータ《楽しき狩こそわが悦び》より「羊は安らかに草を食み」(M, K & T), (5) W. A. モーツァルト：オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》より「女も15になったら」(M & K),

(6) A. グラズノフ：プレリュードとフーガ ニ短調 (K), (7) ノーヴィ・ソソチの『クラリス修道院遺稿集』より (K), (8) S. モニューシュコ：ドゥムカ (M & K), (9) A. アレンスキー：眠れ、わが子よ (同), (10) A. ルビンシテイン：夜 (同)

この催しは、北海道大学パイプオルガン研究会、北海道ポーランド文化協会、日本アレンスキー協会の共催により実現しました。北大の関係部署をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

北海道大学パイプオルガン研究会は、国内でもユニークなパイプオルガンを専門的に取り扱う学生サークルとして、その演奏を中心に活動するとともに、その普及活動の一環としてクラーク会館で開催されるオルガン関連イベントを後援させていただいています。今後も北大のオルガンが学内外で知られ活用されるよう微力をつくしたいと思います。

高等教育開発研究部門は、全学教育における芸術科目の充実の観点からこの企画を後援し、芸術と文学「パイプオルガンとその音楽」(藤原一弘講師・集中講義)との密接な連携をはかりました。今後もクラーク会館パイプオルガンの活用と芸術科目の充実のためにアイディアを出したいと思います。

以下に、日本アレンスキー協会会長川染雅嗣先生の印象記をご紹介します。

(細川 敏幸, 棟朝 雅晴・情報基盤センター教授・パイプオルガン研究会顧問, 安藤 厚・名誉教授・北海道ポーランド文化協会会長)

マリア・マグダレナ・カチョルさんの音楽

昭和音楽大学 教授 川染 雅嗣

8月17日に函館本線は脱線事故が起り不通になった。その惨状をテレビで観て戦慄した。もし私の札幌行が一日遅れていたら、カチョルさんの演奏を一生聴けなかったかもしれない。そう思うと、偶然とはいえそこには見えない力が働いているに違

ないと思わざるを得ない。

8月13日に函館入りした私は、キャンプディレクターを務めているイカール国際ミュージックキャンプで子供たちに室内楽を指導し、16日の朝の特急で札幌に移動した。函館のキャンプは今年で3

回目だが、こんなに湿っぽく暑い函館は初めてであった。札幌も似たような気候で、東京とさほど変わらないくらいである。会場のクラーク会館まで歩いて行く間に、汗だくになってしまった。

クラーク会館にはいささか思い出がある。札幌北高に通っていた私は、昼休みに自転車を飛ばしてクラーク会館まで行き、ご飯を食べて午後の授業に間に合うように帰ってくるというバカな遊びに熱中していたときがある。何度か試したがかなりの強行軍である。その時の思い出として残っているのは、クラーク会館の料理がひどく不味かったということくらいである。ましてやそこにパイプオルガンがあることは、今回の企画で初めて知ったくらいである。

当日会場は多くの聴衆で埋め尽くされ、正直札幌の音楽ファンの見識の高さに驚いた。普段日本アレンスキー協会のイベントでの観客動員に苦労していることを思うと、一体どんな人たちが聴きに来ているのかと不思議な気持ちになった。

この日の会は前半が講演、後半が演奏である。やがて長身のポーランド美女が登場した。彼女がその日の主役のマリア・マグダレナ・カチョルさんである。ポーランドのオルガン音楽についての説明がひとしきり終ると、演奏に入った。バッハのトッカータとフーガ ニ短調で始まった演奏は、様々な時代の作品を網羅した大変興味深いものであった。カ

チョルさんの演奏はまさしく正統的なもので、無駄な虚飾を一切排除した、極めて簡潔かつ十分な彼女そのものともいうべき清廉なものだった。大向こうの受けを狙った軽佻浮薄な演奏が蔓延する現代にあつて、彼女の音楽は貴重な存在である。

終演後はカチョルさんを囲んで食事会があり、共催団体の代表として私も出席させていただいた。それのみならず、10年ほど使っていなかったポーランド語で乾杯のご挨拶までさせて貰い、その錆びついたポーランド語に我ながら愕然としたものである。話題は多方面に及び、しばらくぶりでの知的な時間を過ごすことができた。Kitaraのオルガニストの任期は1年ということだが、それはいかにも短いと言わざるを得ない。日本での生活に慣れたころには交代である。今回最も心残りなのは、彼女の演奏を一度もKitaraで聴いたことがないことである。ポーランドに帰国してからも度々日本を訪れ、演奏して欲しい。その時は是非共Kitaraで聴いてみたいものである。

最後に余談だが、ショパンは少年時代に、ワルシャワの教会でオルガンを弾いていたと伝えられている。ショパンのあの徹底したレガート奏法とそれを支える複雑な指使いは、実はこのオルガン演奏の体験から生まれたものではないかとも言われる。真偽のほどは確かではないが、十分に考えられることである。そんなことをふと思い出した。

カチョルさんの益々の活躍を切に祈念し、この文章を締めくくりたい。

(かわそめ まさし)

(北海道ポーランド文化協会誌『ポーレ』No.80より)



写真1 松井亜樹さんとカチョルさん



写真2 カチョルさんと金多景さん(オルガン研究会)

生涯学習 LIFELONG LEARNING

公開講座「アドバンスドランニング講習(2期)」が開催されました

7月10日より8月15日まで、隔週木曜日の19時から市民ランナー対象のランニング講習会が行われました。この公開講座は、フルマラソンで好タイムを目指す市民ランナーを対象に、北海道大学陸上競技場において陸上競技部の学生がペースメーカーをつとめて、一人ではなかなかできない高強度のトレーニングを行うものです。1期目は5月～6月の2ヶ月行われ、第2期として20名強の参加がありました。天候も恵まれ、日も長い時期でもあり参加

者も充実したトレーニングになったようです。途中気温の高い日もありましたが、無事当初スケジュールを消化することができました。ただ、講習会の行われた時間帯は蚊が多く、汗をかいた身体は標的になりやすかったために、練習後に参加者の方とあまりお話しすることができなかつたのが残念でした。

なお、1期、2期を引き継ぐ形で9月5日から10月17日までの予定で3期が開催されています。

(瀧澤 一騎)

スポーツトレーニングセンター耐震補強工事について

10月1日から12月20日までの予定で、スポーツトレーニングセンターの耐震補強工事が行われます。工事中はスポーツトレーニングセンターの体育館施設は利用できません。

工事の予定や進捗状況については、スポーツトレーニングセンター Facebook や公式サイトを通じて情報提供致します。

公式サイト：<http://life1.high.hokudai.ac.jp/sports/>
Facebook：<https://www.facebook.com/HokkaidoUniversitySportsTrainingCenter/>

ご不便をおかけ致しますが、よろしくお願い致します。

(瀧澤 一騎)

科学技術コミュニケーション CoSTEP

発光分子をテーマとした科学イベントを多角的に実施

2013年の夏、CoSTEPは発光分子をテーマとした二つの科学イベントを実施しました。一つ目は7月21日(日)に開催した第70回サイエンス・カフェ札幌「光る分子が世界を描く～カメレオン発光体、発明!」。もう一つは8月7日(水)の2013サイエンスパーク(北海道庁・北海道立総合研究機構主催)に出展したイベント「まるでカメレオン!?光る生物の世界の不思議!」です。

どちらも北海道大学大学院工学研究院教授の長谷川靖哉教授と同研究室の学生と実施しましたが、大きな違いもあります(表1)。同じ研究テーマを異なる対象向けに、異なる形式で科学イベントにした今回の取組みについて報告します。

話題を呼んだ「カメレオン発光体」

イベントに先立つこと約2か月前の5月10日。

材料化学を専門とする長谷川教授が「カメレオン発光体」を作製したというプレスリリースが発表されました。カメレオン発光体は熱に強い金属錯体で、-80度から220度という広い範囲で緑色から黄色、オレンジ色、赤色と正確に素早く変化するという、これまでにない発光分子です。

このプレスリリースを受け、新聞各紙やテレビニュースでカメレオン発光体が報道されました。CoSTEPではこのプレスリリース以前から長谷川教授の研究に注目し、サイエンス・カフェ札幌の企画を進めてきました。そして最新の成果であるカメレオン発光体を柱にした、「見て面白い」そして「考え」「共有する」イベントを実施しました。

サイエンス・カフェ札幌

—化学がもたらす未来と課題を語る

サイエンス・カフェ札幌「光る分子が世界を描く～カメレオン発光体、発明！」は、特に対象を絞らず、大人数の来場者が発光分子について知り、考えるイベントとしました。

そのためまず、長谷川教授は身の回りにある「光るもの」のお話から始めました。例えばビタミンCを含んでいる健康ドリンクは、紫外線をあてると緑色に光ります。さらに、簡単な実験をいくつも交えながら発光分子とは何かを解説していただきました。目玉はカメレオン発光体が塗られた紙飛行機の実験です。この紙飛行機を液体窒素で冷やし、紫外線をあてると緑色に光ります。そして温風をあてると、オレンジ色に。色鮮やかに変化する様子に会場はどよめきました(写真1)。

後半は、発光分子はどのように使うことができるのかを来場者が書いた質問カードを元に議論しました。会場からは、「カメレオン発光体をビルに塗って巨大な温度計に」「化学物質などを検知するセンサーに」といったアイデアが出ました。

最後に長谷川教授は「どんなに便利な物でも、人体や環境にとって良くないものは使うことはできません」との言葉でカフェを締めくくりました(写真2)。科学技術を考える上で重要な視点を共有できたのではないかと思います。

サイエンスパーク出展イベント

—自分たちでつくる光る生物の世界

夏休み中の8月7日に開催された2013サイエンスパーク。ここにCoSTEPのグラフィックデザイン実習生が中心となって、長谷川研の学生と共同でワークショップ「まるでカメレオン!?光る生物の世界の不思議!」を出展しました。

長谷川研では様々な発光分子を作製しています。一方、自然界にも様々な光る生物がいます。このふたつの「光るもの」をつなげ、子どもたち自身が、「発光」という切り口から生物と化学の世界をのぞいてみる、というワークショップとしました。

会場に集まった20名の子どもたちの前に広げられた大きな紙。そこには森と海が描かれています。そしてその小さな世界には、長谷川研の発光分子で描かれた実在の生物もいます。子どもたちはブラックライトを片手に、ホタル等の光る生物をつぎつぎと見つけて観察し、寄り添う学生たちがその生物たちの解説をしました。

表1 二つのイベントの概要

	サイエンス・カフェ札幌	サイエンスパーク 出展イベント
開催日時	'13年7月21日(日) 14:00-15:30	'13年8月7日(水) 12:30-13:30
会場	Sapporo55ビル1階 インナーガーデン	札幌駅前通 地下歩行空間
対象/規模	全般/大規模	小学生中～高学年 及び保護者/小規模
来場者数	約80名 (来場者の93%が20代以上)	20名 (保護者を含まない数)
実施形式	トークイベント形式 実験デモや展示、質問カード による意見募集・質疑も 実施	ワークショップ形式 グループに分かれてイラスト を作成し、全員で共有。 実験デモも実施



写真1 カメレオン発光体を塗った紙飛行機で実験



写真2 来場者にメッセージを伝える長谷川教授



写真3 子どもたちが完成させた「光る生物世界」

次は発光分子を使ったデザインワークです。自分だけの光る生物をデザインしよう、という呼びかけに、子どもたちは真剣に筆を走らせます。そして光るタコ、光るクワガタ、光るクローバーなどが誕生。最後はそれらを森と海の小さな世界に貼り付け、「光る生物世界」を全員で完成させました(写真3)。記念撮影は保護者の方にも喜ばれ、夏休みの思い出づくりに一役買うことができました。

様々な人々をつなげるために

発光分子は、視覚的なわかりやすさがあります。しかしそれらを多様な人々と共有するには、対象に合わせた設計が必要です。今回はまず対象別に二つのイベントに分けました。さらに、実験デモや質問

カード、「光る生物世界」のような来場者の視点を集め、参加を促すしかけを用いました。

今回の2イベントの好評を受け、10月27日にはデザイン分野の一大イベントである札幌デザインウィーク2013に「光るサイエンスワールド」と題したワークショップを出展する予定です。これらのイベントは、CoSTEPが積み上げてきた学内外とのネットワークによってタイムリーな実施が可能になったと言えます。2005年からのサイエンス・カフェ札幌は70回を数え、サイエンスパークへの出展も7回目となりました。今後も北大の研究者や学外関係者と連携し、社会に向けて様々な方法でアプローチしていきたいと考えています。

(川本 思心)

日誌 EVENTS, June-August

6月

- 3日(会議) 平成25年度第2回学生委員会
- 7日～8日(研修) 教育ワークショップ(奈井江)
- 17日(会議) 平成25年度第1回卒業生調査委員会(東京オフィス)
- 19日(会議) 全学教育科目責任者会議(文系基礎科目)
- 20日(会議) 平成25年度第1回全学教育専門委員会
- 21日(説明会) 大学・短期大学進学相談会(札幌)
- 24日 平成26年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 25日(会議) 全学教育科目責任者会議(理系基礎科目)
- 25日(会議) 平成25年度第1回生涯学習計画研究専門委員会
- 27日(会議) 平成25年度第3回教育改革室会議
- 27日(会議) 成績評価結果検討専門部会

7月

- 1日～29日(行事) 北海道大学公開講座(計8回)
- 3日(会議) 全学教育科目責任者会議(外国語科目)
- 9日(会議) 平成25年度第1回高等教育開発研究専門委員会
- 10日(会議) 平成25年度第1回IRシステム開発委員会
- 12日(会議) 高等教育推進機構予算・施設・安全管理委員会
- 12日 平成26年度入学者選抜要項公表
- 13日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2013(大阪)
- 15日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2013(東京)
- 19日(説明会) 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)

- 19日(会議) 第4回大学IRコンソーシアム運営委員会(TV)
- 20日(行事) 北海道12国公立大学進学コンソーシアム2013 in 旭川
- 22日(会議) 総合教育移行専門委員会
- 26日(会議) 全学教育専門委員会
- 28日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2013(横浜)

8月

- 1日(会議) 平成25年度第1回高等教育推進機構学務委員会
- 1日(会議) 平成25年度第2回高等教育推進機構運営委員会
- 1日(行事) 北大セミナー in 富山
- 2日(会議) 平成25年度第3回学生委員会
- 3日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2013(名古屋)
- 3日～6日(行事) オープンキャンパス(札幌キャンパス)
- 5日(行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)
- 6日(会議) 平成25年度第1回英語力評価研究委員会
- 7日(会議) 平成25年度第1回教学評価運営委員会
- 7日(シンポジウム) 平成25年度IRシンポジウム
- 7日(会議) IRシステム開発委員会
- 23日(会議) 第5回大学IRコンソーシアム運営委員会(TV)
- 27日(会議) 総合教育学生専門委員会
- 29日(会議) 平成25年度第4回教育改革室会議
- 29日～30日(会議) 第63回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会(福島大学)

行事予定 SCHEDULE, November-January

◆11月

- 17(日) AO入試・帰国子女入試

◆12月

- 4(水)～6(金) 履修登録した科目の取消し受付(Web)
- 24(火) 月曜日の授業を行う日(火曜日の授業は行わない)
- 26(木)～1月3日(金) 冬季休業日

◆1月

- 6(月) 授業再開
- 14(火) 月曜日の授業を行う日(火曜日の授業は行わない)
- 17(金) センター試験準備(休講)
- 18(土)～19(日) 大学入試センター試験
- 22(水) 水曜日の授業終了日
- 29(水) 初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
- 30(木) 木曜日の授業終了日
- 31(金) 金曜日の授業終了日

ニュースレター 2013, No.96 目次

〈巻頭言〉「武士道」必修化のお知らせ? ? ... 山田 邦雅 1	「大学教育の質改善に向けた企業からの意見収集調査報告書 2013」を発行 13
日本理科教育学会 第 63 回全国大会, 北大で開催される 3	各学部, 研究科等の FD・TA 研修実施状況を公開 — 一次世代 FD 研究会 — 14
教育総長賞受賞者の授業から ピア・ラーニング重視の授業の試み 宮内 泰介 4	2013 年度 IDE 大学セミナー開催される 15
教育総長賞受賞の 3 つのポイント 坂井 哲 5	歯学研究科の FD ワークショップに参加 19
Learner-centric learning of English language 河合 剛 6	初心者向け ELMS ミニ講座を開催 19
フレッシュマンセミナーの授業改善 南保 明日香 7	第 15 代 Kitara 専属オルガニスト・カチヨルさんの クラーク会館オルガンリサイタルに 400 人来聴! 20
「体育って何」を形にする授業をめざして 厚東 芳樹 8	公開講座「アドバンスドランニング講習 (2 期)」が開 催されました 22
学務委員会報告 9	スポーツトレーニングセンター耐震補強工事について 22
平成 25 年度 全学教育科目企画責任者名簿 11	発光分子をテーマとした科学イベントを多角的に実施 22
2013 年度 IR シンポジウム 「教学評価 (IR) の国際的進展と日本の今後」開催 12	日誌・行事予定 25
	目次・編集後記 26

編集後記

「反転授業」をご存じでしょうか。

日本では、学習者は授業にて講義を受け、宿題等の課題で授業外に復習するという流れが一般的です。この“授業”と“授業外学習”で行う内容を反転させる、すなわち、教科書等をもとに学習者が事前に予習をし、授業で従来は宿題とされた課題について、学生同士のグループワークや、教員による個別的指導により取り組む、このような授業形態が反転授業と呼ばれています。

反転授業は、IT 技術の発達にともなう授業外学習の多様化等により、海外の一部では普及してきています。日本でも、小学校で反転授業を試行する自治体もあらわれるようです。反転授業に限らず、様々な学生参加型アクティブラーニングの手法があります。皆様も一度試してみたいかがでしょうか。

(眼)

ニュースレター (旧「センターニュース」)

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)

通算 第 96 号

発行日： 2013 年 11 月 15 日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話 (011) 706-7520, FAX (011) 706-7854
 編集委員：◎細川敏幸・山田邦雅・竹山幸作・木村純
 亀野淳・三上直之・瀧澤一騎・鈴木誠
 池田文人・飯田直弘
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話 (011) 706-7514, FAX (011) 706-7521
 インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>